

## 審査の結果の要旨

氏名 モッタキ ゴヘル

提出された論文「Reevaluating Collectivity and Linkage in Housing Based on Selected Design Practices in Iran and Japan（イランと日本の設計事例にもとづく住戸集合性と結節要素の再評価）」は、集合住宅における住戸の集合性（collectivity）と結節要素（Linkage）の評価に関する新たな方法論を提示することを目的としている。集合住宅における住戸の集合性をめぐる理論の創出については既に半世紀を超える歴史があるが、本論では、既往文献研究として欧米日を中心とした集合住宅の住戸の集合の仕方とその評価法について再検討を施したのち、集合住宅設計者へのインタビューを通じたテキスト分析とグラウンデッドセオリー理論を用いた分析と、独自の空間形態分析方法を行い、それを統合するという方法論を用いて、新たに住戸の集合性を評価する手法を提案している。

本章の構成は、以下のとおりである。

第1章では、研究の背景、目的、方法論、対象事例の位置づけ、既往研究の検討における本研究の位置付け、そして、本論の構成について述べている。

第2章では、1960年代から盛んにおこなわれるようになった集合住宅設計の際に考えられた、住居の集合性に関する既往研究を、社会心理学、複雑性に関する諸科学、建築学などの幅広い分野において分析した結果、現時点での住戸集合性に関する理論の整理を行い、より実証的な形での集合性に関する追究の必要性とその課題を説いている。

第3章では、本研究における手法論を展開している。集合住宅における住戸の集合性に対する分析方法が多数ある中、ここでは、2種類の方法論が選択される。一つは直接設計者へインタビューすることによって得られる言語情報をテキスト分析し、さらにそれを社会学や看護学領域で用いられるグラウンデッドセオリー理論にのっとった分析方法によって解析する方法である。そしてもう一つは、実際に設計された集合住宅の図面および、実際の空間の三次元的な物理レイアウトから客観的に読み取れる、住戸間の関係性の情報を一定の手続きで加工することによって得られる住戸集合性の質を評価するという、独自の手法(建築空間形態分析)である。こうした二つの分析手法を統合した手法を用いていることが、本研究のオリジナルな部分である。

第4章では、第3章で述べた手法論の一つであるグラウンデッドセオリー理論を用いた、設計者へのインタビューのテキストの分析が行われている。槇文彦氏を含む著名な建築家へのインタビューが実現できたことに加え、特に集合住宅の住戸集合性に焦点を当ててインタビューーたちの言説情報を獲得できたことの意義は大きく、さらに、グラウンデッドセオリー理論を使ってそれらを分析するという新たなアプローチによって、設計者の立場で考える住戸集合性の階層性や構造性が明らかとなった。

第5章では、第3章で述べた第2の手法である、建築空間形態分析を第4章と同じ対象の集合住宅に施している。建築形態分析の手法は1960年代からいくつかの代表的なものが構築されてきたが、本章ではこれらの成果を踏まえ、第4章で展開したグラウンデッドセオリー理論に基づく分析によって得られた住戸集合性に関わる特性群を手掛かりとして、独自の形態分析が行われたことが独創的である。形態分析は、客観的にだれでも物理的に把握できる要素であり、その要素と、普段は把握できない設計者の思考が、どのように関連しているのかを明らかにし、集合住

宅の真の住戸集合性とそれらをつなぐものとしての結節要素の関係を、従来よりも深いレベルで解釈できることを示している。

第6章は、上述の第3章、第4章、第5章の結果を踏まえ、集合住宅における住戸の集合性に関して、新たな方法論から導き出された知見がまとめられている。

このように、本研究は長い間建築学の中で課題となっていた集合住宅の集合性の評価手法を、独自の手法を開発しながら再検討するという、意欲的かつ実証的かつ研究として評価される。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。